

〔報告〕

在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した 教育効果の検討

Examination of educational effect by introducing rubrics into home nursing practice

作山 美智子¹⁾, 傍島 智子¹⁾, 安藤 莉香¹⁾, 小笠原 喜美代²⁾, 仙石 美枝子²⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

2) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科非常勤講師

要旨

本研究は、在宅看護実習においてルーブリック評価を導入し、その教育効果を検討することである。2021年度、前期4年次生27名、後期3年次生25名と、実習指導者20名に、学生評価として自記式質問紙とルーブリック評価表への回答を依頼した。3・4年次生は実習目標の「態度・行動」に関する項目はともに最も得点が高かった。3年次生と4年次生との学年による有意差はなかった。訪問看護ステーションの指導者評価では「多職種の役割・多機能の必要性」、「多職種連携の中での看護職の役割」、「教員への報告、約束」において、3・4年次生間で有意差が認められた。学生の自記式質問紙・自由記載で「自分が何を目標に実習に取り組めばよいか確認することができた」等、目標の可視化が図られ、ルーブリック評価表による一定の教育効果が得られた。

【キーワード】在宅看護実習、ルーブリック評価、教育効果、学修成果

I. 緒言

看護学実習は、学生が学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科目としての看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適応する能力を修得する授業である（大学における看護系人材の養成の在り方に関する検討会、2020）。一方、中央教育審議会（2012）は、「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」による学士課程答申において、「知識・理解」、「汎用的能力」、「態度・志向性」及び「総合的な学修経験と創造的思考力」に関する能力の育成を重視し、双方向の授業による質の高い効果的な教育と学修成果の可視化を求めている。

在宅看護は今日の社会情勢の変化や医療の発展

に伴い、高齢になっても、認知症になっても、介護が必要な状態になっても、障害をもっても、できる限り住み慣れた地域で暮らしたいと思っている療養者を支え、学生は在宅看護実習でその看護を体験することになる。また、度重なる介護保険（第5次）改正で、地域包括ケアシステムの深化が急務となり訪問看護師にもその一翼を担う活動の期待は大きく、在宅看護の重要な課題となっている。

一方、在宅看護実習施設は、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、看護小規模多機能型居宅介護、通所リハビリテーション、デイサービス、グループホームといった多岐に渡るサービス、かつ複数施設で展開されている。教員が学生の居宅訪問に同行することはなく、実習指導者は事業所に不在となることもある。そのため実習施設が

多施設にわたっていること、指導者や教員が常に実習場に在中していないため、学生がいつでも質問できる状況ではなく、教育指導においては課題が存在している。

双方向の授業と学修成果の可視化が求められる状況の中で、従来のテスト法では可視化されづらい知識の構成過程や自らの興味や関心を基盤とした高次の能力やパフォーマンスを評価するツールとしてルーブリックが注目されている。ルーブリックは「成功の度合いを示す数値的な尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準」(田中、2003)である。学習者に学びの途中で提示し、フィードバックするプロセスを通して学習評価活動そのものを学びに活かす取り組み(安藤、2014)であり、評価を学びのプロセスの中に自然に組み入れた形で行うことができる。学生は求められる結果がどの程度達成される途上にあるのか、またどの程度達成されたのかについて、より認識を深められる。一方、自律的な学習態度を培うツールとしてどう位置付けられ、その活用方法と効果について検討がなされ、ルーブリックを学生自身が自分達で作成することが、自律的な学習態度に関連していることを明らかにしている(遠海ら、2012)。

看護教育においては基礎看護学実習(岡山ら、2014)や老年看護学実習(古城ら、2013)などでルーブリック自己評価表を作成し、その効果と課題が報告されている。在宅看護学実習(深山ら、2017)においては、ルーブリック自己評価表を用いたことで学習活動が高まり、主体的に学習活動に取り組む学生は自己評価表の使用頻度が高いことを明らかにしている。為永ら(2021)は、評価項目に看護過程の展開、多職種連携と専門職の役割、地域包括ケアシステム、事前学修の取組を項目立て、学生が実習で学ぶ視点を定めることができたことを報告している。そこで、本研究は在宅看護学実習においてルーブリック評価表活用による教育効果について検討する。A大学では3年次生と4年次生において、実習経験やオリエンテー

ション方法に違いがあったため、3年次生と4年次生との比較、質問紙調査及び自由記載から学生と指導者の双方向性を確保し教育効果を検討する。

II. 研究目的

在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した教育効果を検討する。

III. 用語の定義

1. 1996年の指定規則改定による「在宅看護論」はA大学では「在宅看護学」として教授している。本研究における「在宅看護実習」は在宅看護論の臨地実習に該当する。

2. A大学の在宅看護実習は3年次後期と4年次前期に位置付けられ、どちらかの時期で2週間実施される。実習配置によって学生側は在宅看護実習が3年次あるいは4年次履修となる。

IV. 研究方法

1. 調査対象

2021年度に在宅看護実習を履修したA大学学生52名(4年次生27名、3年次生25名)、指導者20名から回答があったルーブリック評価表及び自作の自記式質問紙を調査対象とした。ルーブリック評価表は学生と指導者は同じ評価表を、自記式質問紙は学生には自己評価の視点、指導者には学生を評価する側の視点で質問した。

2. 調査方法

学生には在宅看護実習における学内オリエンテーション時に研究趣旨を口頭で説明し、ルーブリック評価表及び自記式質問紙を配布した。実習終了時に提出したルーブリック評価表と自記式質問紙を調査対象とすることを説明し、回答は提出箱に提出を依頼した。指導者側は看護部長・施設長または事業責任者に文書と口頭で説明し同様の質問紙を配布し、準備した返信用封筒にて郵送を依頼した。

3. 調査期間

2021年5月10日～2021年10月8日

4. 調査内容

1) 自記式質問紙調査

(1) 学生への質問紙

質問紙調査の内容は、学修到達度とコミュニケーションを重点化し、①実習達成目標の理解、②自己の実習目標の到達状況の把握、③指導者が指導した内容の理解、④指導者に指導を求める、⑤グループメンバーとのコミュニケーション、⑥指導者とのコミュニケーション、⑦自己評価、⑧在宅看護実習への活用、⑨評価表の活用頻度、⑩自由記載の合計10項目で、どの程度達成できたか4件法(できた・ややできた・ややできない・できない)で問う形式とした。得点が高い方を「できた」とした。

(2) 指導者への質問紙

①実習達成目標の理解、②学生の実習目標の到達状況の把握、③指導者の立場から学生指導内容の理解、④指導者の立場からの学生指導のしやすさ、⑤指導者の立場から学生の状況を把握する、⑥学生とのコミュニケーション、⑦学生評価、⑧在宅看護実習指導への活用、⑨評価表の活用頻度、⑩自由記載の合計10項目で、どの程度達成できたか4件法(できた・ややできた・ややできない・できない)で問う形式とした。得点が高い方を「できた」とした。

2) ルーブリック評価表

(1) 在宅看護実習で使用了るルーブリック評価表

A大学のこれまでのルーブリック評価表は<療養者の理解：健康課題と生活支援>、<支援対象者としての家族>、<看護過程の思考>、<アセスメントツールの活用>、<多職種連携>、<訪問先でのマナー>の6項目からなる評価視点で構成され、地域包括ケアシステムに関する視点が不足していた。

先行研究において実習目標を評価項目にリンクさせ、かつ地域包括ケアシステムの項目を評価項

目に導入していた為永ら(2021)の大項目「対象者と家族の健康状態と生活状況、看護の理解」、「在宅療養を支える多職種・多機能の役割と連携・協働の理解」と他2項目を採用し、指標の一部を統合、レベル内容の変更等の改変を加えてルーブリック評価表を作成した(表1-1、表1-2)。各項目の評価段階は1から5の5段階、一部3段階で設定し、数値が高い方が高評価とした。

A大学では指導者による学生評価はこれまで、訪問看護ステーションのみに依頼し、その他の実習施設においては実習期間が2日間のため評価はしないで、指導者から学生へのコメントに留まっていた。そのため、今回の調査時点から、すべての実習施設に依頼した。学生は訪問看護ステーション・その他の施設(計2～3枚)のルーブリック評価表を記入した。

5. ルーブリック評価表を活用した事前・実習指導

1) 4年次生への活用方法

実習前のオリエンテーションにて評価項目と活用方法について指導した。その後2週目の学内指導日で活用の実際を確認し中間評価をし、途中から訪問看護ステーション以外の実習では、ショートカンファレンスの場でも学修すべき内容すべてを確認するツールとして実施した(図1)。

2) 3年次生への活用方法

基本的には4年次生と同様であるが、在宅看護方法論IIと実習前特別演習において、ルーブリック評価表の活用について事前に指導を行った(図1)。

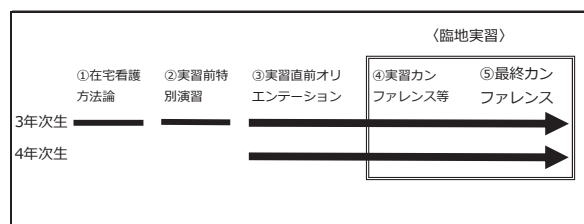


図1 ルーブリック評価表を活用した事前・実習指導

表 1-1 (実習先：訪問看護ステーション) 在宅看護実習 ルーブリック評価

実習の達成目標	評価項目 (指標)	評価基準	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
1. 在宅で療養生活を送っている対象者とその家族の健康状態と生活状況、および在宅における看護の特徴を理解できる。(20点) 2. 在宅療養を支える多職種・多機能の役割と連携について理解できる。(10点) 3. 実習で体験した事象を科学的に探究し、看護を創造・革新し、看護の発展に貢献している。(10点)	1) 症状・疾患についてアセスメントを適切に実施し、看護診断・看護計画が設定できる。(5点)	疾病などの知識と療養者の状態を関連づけることができた(1点)	疾病と療養者の状態を関連づけることができた(2点)	1つの項目のアセスメントは適切で看護診断が適切である。実現可能な目標を1つ設定できた(3点)	2つの項目のアセスメントを適切に実施し、看護診断と実現可能な目標を設定できた(4点)	3つ以上の項目のアセスメントを適切に実施し、的確な看護診断と実現可能な目標を設定できた(5点)	
	2) 療養者の疾患・心理・自宅の環境・家族の状況・社会資源などの側面から、具体的な援助計画が立案できる。(5点)	援助計画は立案できた。原理原則、抽象的な点で課題がある(1点)	援助計画は原理原則を踏まえている。療養者の個別性の配慮が課題(2点)	援助計画は原理原則を踏まえており、療養者の疾患とそれ以外3つ以上の側面に配慮できた(4点)	援助計画は原理原則を踏まえており、療養者の疾患とそれ以外3つ以上の側面に配慮できた(4点)	援助計画は原理原則を踏まえており、療養者の疾患とそれ以外3つ以上の側面に配慮できた(4点)	援助計画は原理原則を踏まえており、療養者の疾患とそれ以外3つ以上の側面に配慮できた(5点)
	3) 在宅における看護の特徴について個別性・生活・経済性・家族・環境・優先順位等の側面から記載、説明できる。(5点)	在宅における看護の特徴について1つの側面から記載したり、述べることができた(1点)	在宅における看護の特徴について2つの側面から記載したり、述べることができた(2点)	在宅における看護の特徴について3つの側面から記載したり、述べることができた(3点)	在宅における看護の特徴について4つの側面から記載したり、述べることができた(4点)	在宅における看護の特徴について5つの側面から記載したり、述べることができた(5点)	
	4) 通所ケア・ピアや多機能サービスを利用している対象者について、病歴、生活、活動・休息、コミュニケーション、家族、社会資源等の側面から説明することができる。(5点)	通所ケア・ピアや多機能サービスを利用している対象者について、1つの側面から記載・説明ができた(1点)	通所ケア・ピアや多機能サービスを利用している対象者について、2つの側面から記載・説明ができた(2点)	通所ケア・ピアや多機能サービスを利用している対象者について、3つの側面から記載・説明ができた(3点)	通所ケア・ピアや多機能サービスを利用している対象者について、4つの側面から記載・説明ができた(4点)	通所ケア・ピアや多機能サービスを利用している対象者について、5つの側面から記載・説明ができた(5点)	
	6) 在宅ケアにおける他職種の役割、多機能の役割(地域包括支援センター等)を理解できる。(2点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているかを一部把握できた(0.4点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているかを把握できた(0.8点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているかを把握できた(1.2点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているかを把握できた(1.6点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているかを把握できた(2.0点)	
	7) 在宅ケアにおける多職種連携の実際とその必要性について理解することができる。(4点)	多職種での情報共有の実際についてわかりにくい点があった(0点)	多職種での情報共有の実際についてわかりにくい点があった(1点)	多職種での情報共有の実際についてわかりにくい点があった(1点)	多職種での情報共有の実際についてわかりにくい点があった(2点)	多職種での情報共有の実際についてわかりにくい点があった(3点)	
	8) 在宅ケアにおける多職種連携の中での看護職の役割を理解することができる。(4点)	訪問看護や通所ケア・ピアにおける看護職の役割について記載、述べることができなかった(0点)	訪問看護や通所ケア・ピアにおける看護職の役割について記載、述べることができた(1点)	訪問看護や通所ケア・ピアにおける看護職の役割について記載、述べることができた(2点)	訪問看護や通所ケア・ピアにおける看護職の役割について記載、述べることができた(3点)	訪問看護や通所ケア・ピアにおける看護職の役割について記載、述べることができた(4点)	
	9) 地域包括ケアにおける看護職の役割を考察することができる。(3点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を考察することができなかった(0点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を考察することができた(1点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を考察することができた(2点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を考察することができた(3点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を考察することができた(4点)	
	10) 実習の学びを次の視点で考察することができる①実習で実際に学んだ内容が記載されている②テーマに対して、的確な内容の記載③自分の考えの論旨が一貫している④実習で体験した事象を客観的に視点を考察できている(7点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち1つの項目も満たしていない(1点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち2つの項目も満たしている(2点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち3つの項目も満たしている(3点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち4つの項目も満たしている(4点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち5つの項目も満たしている(5点)	
	4. 看護学生として自覚し、責任ある行動・態度が取れる(10点)	1) 事前学習を十分に行い、実習に必要な知識を身に蓄積することができる(3点)	事前学習が指定の期日までに提出できなかった(0.6点)	指示された事前学習の内容を把握できなかった(1.2点)	指示された事前学習の内容を把握できなかった(1.8点)	指示された事前学習の内容を把握できなかった(2.4点)	事前学習で得た知識を実習で十分活用でき、意欲的に取り組むことができた(3点)
12) 療養者および家族に対し尊重した態度で接することができる(2点)		身だしなみや接辞、ことば遣いなどについて複数回注意を受けたが改善できなかった(0.5点)	身だしなみや接辞、ことば遣いなどについて1回注意を受けたが改善できなかった(1.0点)	身だしなみや接辞、ことば遣いなどについて2回注意を受けたが改善できなかった(1.5点)	身だしなみや接辞、ことば遣いなどについて3回注意を受けたが改善できなかった(2.0点)	療養者及び家族に対して丁寧な言葉遣い、態度で関わることができた(2点)	
13) 療養者や家族、実習指導者との約束(期限、集合時間)を守る(4点)		療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが複数回あった(0点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが1回あった(1点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが2回あった(2点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが3回あった(3点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守ることができた(4点)	
14) 教員への報告、約束を守ることができ(1点)		教員への報告、約束を守れないことが複数回あった(0点)	教員への報告、約束を守れないことが1回あった(0.5点)	教員への報告、約束を守ることができた(1.0点)	教員への報告、約束を守ることができた(1.5点)	教員への報告、約束を守ることができた(2.0点)	

為永ら(2021)、一部改変

表 1-2 (実習先：他の施設) 在宅看護実習 ルーブリック評価

実習の達成目標	評価項目 (指標)	評価基準	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
2. 在宅療養を支える多職種・多機能の役割と連携・協働について理解できる (10点)	6) 在宅ケアに関わる他職種の役割、多機能の役割 (地域包括支援センター等) を理解できる (2点)	在宅ケアにおける他職種の役割、多機能の役割 (地域包括支援センター等) を理解できる (2点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているか把握できた (0.4点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているか把握できた (0.8点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているか把握でき、その役割を一部説明できた (1.2点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているか把握でき、その役割を2つ以上説明できた (1.6点)	療養者および家族にどのような職種が関わっているか把握でき、その役割をきちんと説明できた (2点)
	7) 在宅ケアにおける多職種連携の実際とその必要性について理解することができる (4点)	在宅ケアにおける多職種連携の実際とその必要性について理解することができる (4点)	多職種での情報共有の実際について問いたりしたこと、記載・述べることができなかった (0点)	多職種での情報共有の実際について問いたりしたこと、記載・述べることができた (4点)	多職種での情報共有の実際について問いたりしたこと、記載・述べることができた (1点)	多職種での情報共有の実際について問いたりしたこと、記載・述べることができた (2点)	多職種での情報共有の実際について問いたりしたこと、記載・述べることができた (3点)
3. 実習で体験した事象を科学的に探究し、看護を創造・革新していくための基礎的能力を身に着ける (10点)	8) 在宅ケアにおける多職種連携の中での看護職の役割を理解することができる (4点)	在宅ケアにおける多職種連携の中での看護職の役割を理解することができる (4点)	訪問看護や通所サービスにおける看護職の役割について記載、述べることができなかった (0点)	訪問看護や通所サービスにおける看護職の役割についてわかっていたことを記載したり、述べることができた (4点)	訪問看護や通所サービスにおける看護職の役割についてわかっていたことを踏まえて、自分の考えを記載、述べることができた (2点)	訪問看護や通所サービスにおける看護職の役割についてわかっていたことを踏まえて、自分の考えを記載したり、述べることができた (3点)	訪問看護や通所サービスにおける看護職の役割についてわかっていたことを踏まえて、自分の考えを記載したり、述べることができた (4点)
	9) 地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考えることができる (3点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考えることができる (3点)	地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考えることができなかった (0点)	地域包括ケアシステムについて調べることができた (1点)	地域包括ケアシステムについて調べることができた (1点)	地域包括ケアシステムについて調べることができた (2点)	地域包括ケアシステムについて調べることができた (3点)
4. 看護学生として自覚し、責任ある行動・態度がとれる (10点)	10) 実習の学びを次の視点で考察することができる① 実習で実際に学んだ内容が記載されている② テーマに対して、的確な内容の記載③ 自分の考えの論旨が一貫している④ 実習で体験した事象を客観的に分析できている (7点)	実習の学びを次の視点で考察することができる① 実習で実際に学んだ内容が記載されている② テーマに対して、的確な内容の記載③ 自分の考えの論旨が一貫している④ 実習で体験した事象を客観的に分析できている (7点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうちどの項目も満たしていない (1点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち1つを満たすことができた (2点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち2つを満たすことができた (3点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち3つを満たすことができた (5点)	実習の学びを考察するにあたって、実習での経験を踏まえて①～④のうち4つ以上を満たすことができた (7点)
	11) 事前学修を十分に行い、実習に必要な知識を身に着けることができる (3点)	事前学修を十分に行い、実習に必要な知識を身に着けることができる (3点)	事前学修が指定の期日までに提出できなかった (0.6点)	指示された事前学修の内容を網羅できなかった (1.2点)	指示された事前学修の内容を網羅できなかった (1.8点)	事前学修で得た知識を、記録の記載やカンファレンスの意見交換、指導者の質問において活用できた (2.4点)	事前学修で得た知識を、記録の記載やカンファレンスの意見交換、指導者の質問において活用できた (3点)
4. 看護学生として自覚し、責任ある行動・態度がとれる (10点)	12) 療養者および家族に対し尊重した態度で接することができる (2点)	療養者および家族に対し尊重した態度で接することができる (2点)	身だしなみや挨拶、ことば遣いなどについて複数回注意を受けたが改善できなかった (0.5点)	身だしなみや挨拶、ことば遣いなどについて複数回注意を受けたが改善できなかった (1.5点)	身だしなみや挨拶、ことば遣いなどについて複数回注意を受けたが改善できなかった (1.5点)	身だしなみや挨拶、ことば遣いなどについて複数回注意を受けたが改善できなかった (2.5点)	身だしなみや挨拶、ことば遣いなどについて複数回注意を受けたが改善できなかった (2.5点)
	13) 療養者や家族、実習指導者との約束を守る (提出期限、集合時間) (4点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守る (提出期限、集合時間) (4点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが複数回あった (0点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが1回あった (1点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが1回あった (1.5点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守れないことが1回あった (2.5点)	療養者や家族、実習指導者との約束を守ることができた (4点)
14) 教員への報告、約束を守る (1点)	教員への報告、約束を守る (1点)	教員への報告、約束を守れないことが複数回あった (0点)	教員への報告、約束を守れないことが1回あった (0.5点)	教員への報告、約束を守れないことが1回あった (0.5点)	教員への報告、約束を守れないことが1回あった (0.5点)	教員への報告、約束を守ることができた (1点)	

為永ら (2021)、一部改変

6. 分析方法

ループリック評価項目の得点について、学生と指導者の学年毎に単純集計および学年比較のためのt検定を行った。分析は統計解析ソフト SPSS ver.22を用いた。統計学的有意水準は5%未満とした。自記式質問紙は項目毎に単純集計した。自由記載はデータとして取り扱い、内容分析の手法を用いて分析し内容をコード化し、個々のコードの類似性に沿ってサブカテゴリ、カテゴリーを抽出した。

7. 倫理的配慮

学生と指導者には研究の目的、個人情報の保護、参加の任意性と協力しないことによる不利益がないことについて、学生には参加の有無は成績とは無関係であることを書面と口頭で説明した。ループリック評価表と質問紙の返却について、学生には実習終了時に提出箱へ提出することで同意とした。指導者には同意する場合は郵送にて返却を依頼した。本研究は、東北文化学園大学研究倫理審査委員会の審査を受け(文大倫第21-02号)、承認を得て実施した。

V. A 大学の在宅看護実習の概要

A大学の在宅看護実習は、2週間であり訪問看護ステーション(4日間)と訪問看護ステーション以外(地域包括支援センター、グループホーム、デイサービス、通所リハビリテーション、看護小規模多機能型居宅介護、小規模多機能型居宅介護)(2日間ずつ2回)、学内実習(2日間:1日ずつ1週目と2週目)から構成されている。訪問看護ステーションの実習では看護過程を展開し、受持ち療養者以外にも複数件の同行訪問を実施している。実習に関わる教員は5名で、1グループ4~12名の学生、実習施設4~8施設を受け持って指導している。

VI. 結果

1. 自記式質問紙調査

回収結果を表2に示す。3年次生は回答があった49枚において記載不備のあった1枚を除外し48枚(有効回答率98.0%)、4年次生は回答のあった28枚において記載不備のあった2枚を除外した26枚(92.9%)を分析の対象とした。指導者においては回答のあった40枚(100%)を分析対象とした。

表2 自記式質問紙の回収結果

協力者(名)		配布数	回収数	有効回答枚数(有効回答率)	
学生	52	3年次生 25	50	49	48(98.0%)
		4年次生 27	54	28	26(92.9%)
指導者	20	3・4年次生担当	116	40	40(100%)

1) 学生の結果

結果を図2から図10に示す。「実習達成目標の理解」以降の設問では「できた」「ややできた」を肯定評価として以下に述べる。「実習達成目標の理解」について肯定評価は3年次生48枚(100%)、4年次生25枚(96.1%)、同様に「自己実習目標の達成状況の把握」では3年次生46枚(95.9%)、4年次生25枚(96.1%)であった。「指導者が指導した内容の理解」では3年次生45枚(93.8%)、4年次生25枚(96.2%)、「指導者に指導を求める」では3年次生46枚(95.9%)、4年次生23枚(88.5%)、「グループメンバーとのコミュニケーション」では3年次生44枚(91.7%)、4年次生21枚(80.8%)、「指導者とのコミュニケーション」では3年次生46枚(95.9%)、4年次生24枚(92.3%)、「自己評価」では3年次生43枚(89.6%)、4年次生17枚(65.4%)、「在宅看護実習への活用」では3年次生46枚(95.8%)、4年次生21枚(80.8%)であった。「評価表への活用頻度」では2回が3年次生26枚(54.2%)、4年次生11枚(42.3%)、3回以上が3年次生12枚(25.0%)、4年次生3枚(11.5%)であった。

自由記載の結果を表3、表4、表5に示す。表3、表4コード内の()は同意見の人数を示す。

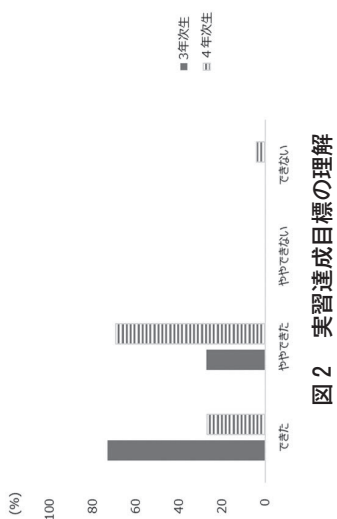


図2 実習達成目標の理解

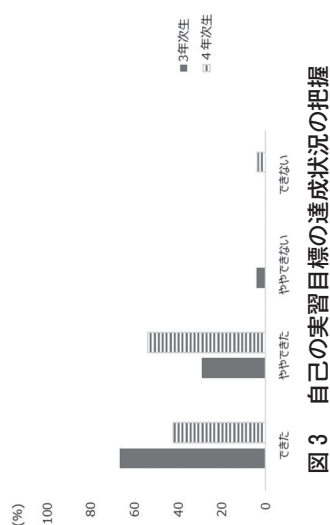


図3 自己の実習目標の達成状況の把握

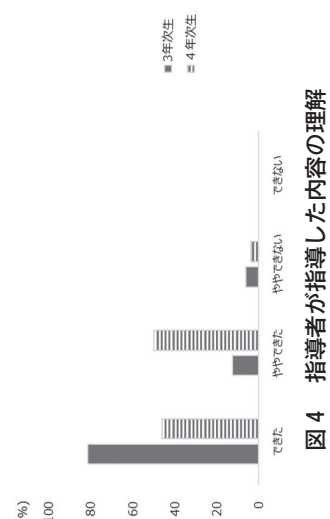


図4 指導者が指導した内容の理解

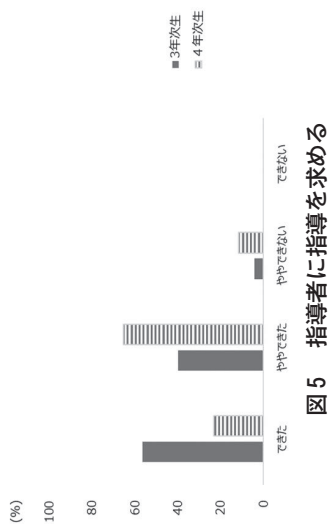


図5 指導者に指導を求める

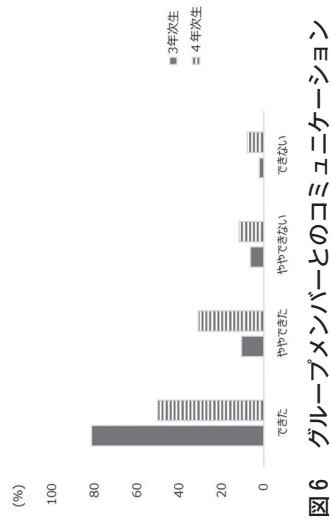


図6 グループメンバーとのコミュニケーション

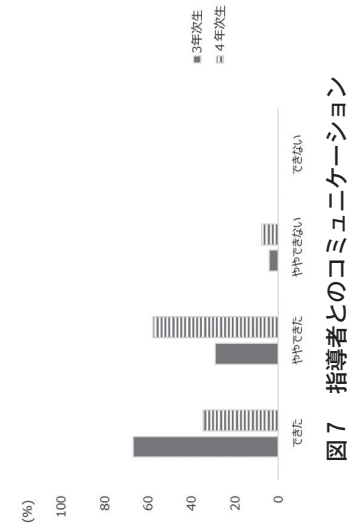


図7 指導者とのコミュニケーション

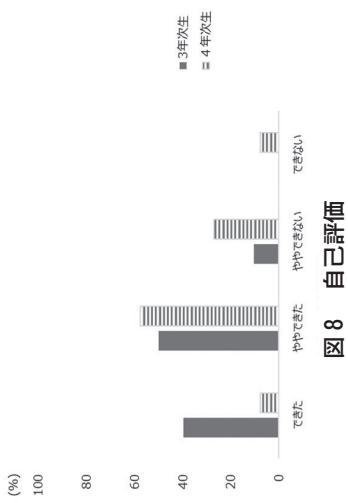


図8 自己評価

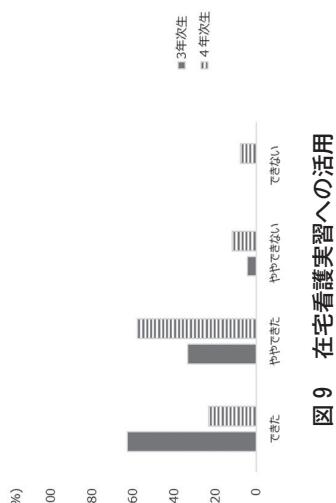


図9 在宅看護実習への活用

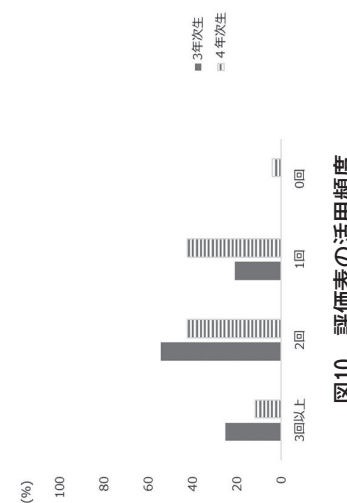


図10 評価表の活用頻度

4年次生では、〔ルーブリック評価があることで自分がどの時点にいるのか把握することができた〕

〔細かく書いてあり、評価しやすかった〕と述べる一方、〔もっと簡潔な内容にして、評価項目が少なくするとやりやすかった〕〔地域包括ケアについて考えるのが難しかった〕を挙げている。3年次生では〔自分が何を目標に実習に取り組みよいか確認することができた〕〔多職種との関わりや役割・連携については、自分で意識して学ぶことができた〕〔看護過程や訪問看護ステーションで学ぶべき視点を振り返ることができ、最後の振り返りとして活用したが、自分の不足している分を再確認できた〕、〔判断が難しかった〕〔評価内容があまりよく分からなかった〕であった。指導者では、〔指導担当者がすべてを把握することは難しく、評価に困ってしまう項目もある〕〔包括支援センターの実習は在宅療養をささえるという項目は、評価内容が判断しにくい〕等があげられている。

表3 質問紙・自由記載：3年次生

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
計画表立案への活用	自己の振り返り	行動計画票の目標立案に役立った (3) どのような視点でまとめればいいのか理解できた 看護師の役割についても評価表を使用することで、目標を明確にして実習に臨むことができた 自分が何を目標に実習に取り組みよいか確認することができた (4) 目標に沿って行う分、自分の学びの内容からさらに考えを深めることができた 目標の着眼点が評価項目として書いてあったので、学習しやすかった 対象者が使っている社会資源についても学ぶことができた 療養者との連携については、学びを深める点で視野を広げることができた 実習中は多職種との関わりや役割・連携については、自分で意識して学ぶことができた
		実習中に何度もルーブリック表を見直すことで、達成目標を意識しながら実習を行えた 実習前にもう一度確認することができたら、さらによい実習にできたと思う 看護過程や訪問看護ステーションで学ぶべき視点を振り返ることができ、最後の振り返りとして活用したが、自分の不足している部分を再確認できた (4) 自分のことを客観的に見て評価することで、自分に足りないことを見つめるよい機会になる 評価にレベルが書いてあることで、どのくらい何をすればいいかわかりやすかった 細かくレベル分けされていることで何をすればいいかわかりやすかった。
評価表の有効活用	自己の振り返り	目標の側面を1つ1つ確認しながら、実習で学ぶことができたので、分かりやすくてよかった 在宅の特徴について学ぶ点も記載されていたため、意識して実習に取り組むことができた 学びが深まることによってルーブリックをうまく活用できたと感じた

表4 質問紙・自由記載：4年次生

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
評価表の活用	学びの明確化	達成目標の理解 段階ごとに達成状況を把握できたことが実習に役立った 評価項目を確認することで、実習で何を学ばなければいけなくなる組み合わせることができた 実習の達成目標が具体的に、実習の1日の目標が立案しやすかった その日に行わなければならないことが明確になった 学べるものが多く充実した実習を行えた どうしていいかわからなくなるため、使っていた 実習先での学ぶ目的を事前に確認できた
		自己の振り返り ルーブリック評価があることで自分がどの時点にいるのか把握することができた 振り返ることで、自分の理解度の確認ができた (2)
評価内容の理解度	評価内容の理解困難	評価内容が明確 細かく書いてあり、評価しやすかった 具体的な目標設定だが、短期間で評価するのはかなり難しかった 実際に活用して分かりやすかったが、毎回確認はしなかった
		評価内容の理解困難 自己評価するには少し難しいように感じた 文字が小さくてあまり使用したいとは思わなかった もっと簡潔な内容にして、評価項目を少なくするとやりやすかった 項目1つ1つの内容が難しく、評価するのに時間がかかった
地域包括ケアへの理解	地域包括ケアへの考察 地域包括ケアについて深く感じることができなかった 困難 地域包括ケアについて考えるのが難しかった	
実習の具現化	到達内容の具現化	達成状況の把握困難 実際に達成できているのかについては分かりにくい感じがした
		到達内容の具現化 具体的な内容などがなく、とても難しかった (3) 指標は説明とあるが、それは問われた場合のみ評価をするのか分からない

*コード内の () は同意見の人数を示す

表5 質問紙・自由記載：指導者

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
評価への困難感	評価の細分化	短期間での評価 2日間の実習では効果的に評価することが難しかった 実習期間中一度だけ同行し評価したりしている現状がある 指導担当がすべてを把握することは難しく、評価に困ってしまう項目もある
		評価の細分化 レベル1～5まで評価基準がこまかく分かれており、評価が難しかった 1～3くらいだと評価しやすい 以前の評価表がやりやすい
評価表の有効活用	指導の目安	スタッフ数名で学生に関わっている スタッフ間で情報共有しながら関わり、評価しているが評価までとなると難しい 十分な評価ができていない不安な部分が多い 1人の指導者が毎日指導できる職場環境ではないので、大きな評価しきれないのが現状
		初回使用の困難 初めてなのでうまく活用できていなかった うまく活用できなかった。内容を十分理解していなかった
実習側の評価の独自性	実習側の評価の独自性	情報共有 今回評価指標と基準が細かく記載されたことでスタッフ間での情報共有がしやすく、評価にもスタッフ間でばらつきが少なくなった ルーブリック評価を活用したのは当事業所を見て初めての試みで、評価側として大変勉強になった 評価表を用いることで、実習で学びたいことがわかり、参考にした 実習指導内容や評価の目安には参考になった
		有効的活用 実習達成目標については理解でき、評価項目もわかりやすかった
実習側の評価の独自性	実習側の評価の独自性	提示された内容と施設側の評価視点の違い 学生とのコミュニケーションは、変わりなし 指導内容は、教科書的指導になりがちで、個性について、指導しづらくなった
		実習側の評価の独自性 包括支援センターの実習では在宅療養を支えるという項目は、評価内容が判断しにくい 必要な評価に対する学生の状況を把握することを15～20分のカンファでは不十分のため、学生が事前レポートを提出し、把握できるようにはなってきた カンファの意味・進め方など工夫が必要

2) 指導者の結果

結果を図11に示す。「実習達成目標の理解」以降の設問では「できた」「ややできた」を肯定評価として以下に述べる。

「実習達成目標の理解」について肯定評価は36枚(90.0%)、同様に「実習目標の到達状況の把握」では31枚(77.5%)、「学生の指導内容の理解」では30枚(75.0%)、「学生指導のしやすさ」では32枚(80.0%)、「学生状況の把握」29枚(72.5%)、「学生とのコミュニケーション」では27枚(67.5%)、「学生評価」では24枚(60.0%)、「在宅看護実習指導への活用」では25枚(62.5%)であった。

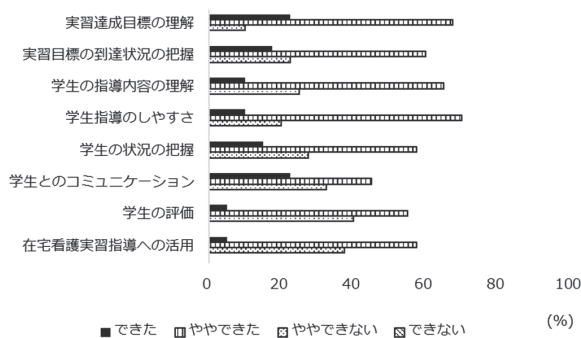


図11 質問紙：指導者集計結果

2. ルーブリック評価表

回収結果を表6に示す。

訪問看護ステーションにおけるルーブリック評価は、3年次生の回答があった25枚において記載不備があった1枚を除外し24枚(96.0%)、4年次生25枚において記載不備のあった4枚を除外し21枚(84.0%)を分析対象とした。その他の施設におけるルーブリック評価は、3年次生の回答があった46枚において記載不備があった9枚を除外し37枚(80.4%)、4年次生38枚において記載不備のあった1枚を除外し37枚(97.4%)を分析対象とした。

指導者では訪問看護ステーションにおいては3年次生担当9枚(100%)、4年次生担当17枚中、

表6 ルーブリック評価表の回収結果

協力者(名)	配布数	回収数	有効回答枚数(有効回答率)
学生 52	訪問看護ステーション 25	25	24(96.0%)
		46	37(80.4%)
	その他の施設	27	25(84.0%)
		52	37(97.4%)
指導者 20	3年次生担当 20	9	9(100%)
		46	23(91.3%)
	訪問看護ステーション 20	17	8(47.1%)
		52	29(67.4%)

9枚を除外し8枚(47.1%)、その他の施設では、3年次生担当23枚中2枚除外し21枚(91.3%)、4年次生担当43枚中14枚除外し29枚(67.4%)を対象とした。

1) ルーブリック評価表における学生自己評価

3年次生と4年次生における自己評価の結果を表7、表8に示す。訪問看護ステーション実習では態度、行動に関する評価項目の「尊重した態度」、「療養者・家族・実習指導者との約束」、「教員への報告」に関して、3年次・4年次生共に最も評価の高いレベル5であった。3年次生において次いで得点が高かった学修項目は「事前学修と実習に必要な知識の獲得」と「多職種・多機能の役割」、次いで「多職種連携の理解」、「多職種連携の中での看護師の役割」であった。同様に4年次生において次いで得点が高かった学修項目は「多職種連携の中での看護師の役割」と「多職種連携の理解」、次いで「多職種・多機能の役割」であった。

他の実習施設では訪問看護ステーションにおける実習と同様に態度、行動に関する評価項目の「尊重した態度」、「療養者・家族・実習指導者との約束」、「教員への報告」に関して、3年次・4年次生共に最も評価の高いレベル5であった。3年次生において次いで得点が高かった学修項目は「事前学修と実習に必要な知識の獲得」、次いで「多職種・多機能の役割」だった。同様に4年次生において次いで得点が高かった学修項目は「事前学修と実習に必要な知識の獲得」、次いで「多職種連携の理解」であった。

次に3年次生と4年次生の比較を行った。有意水準0.05で有意差の検定を実施した。訪問看護ステーションにおける評価(13項目)に有意差は認められず、他の施設の評価(9項目)も同様に有意差は認められなかった。

2) ルーブリック評価表における指導者評価

臨地実習指導者による学生評価を表9、表10に示す。訪問看護ステーションでは指導者による3年次生の評価で最も得点が高かったのは、学修項目「療養者・家族・実習指導者との約束」、「教員

表7 訪問看護ステーション実習のルーブリック評価表における学生自己評価

評価項目	得点		p 値
	学年	Mean±SD	
1) アセスメントし、看護診断・目標を設定	3年次生	3.71±1.042	0.253
	4年次生	3.90±0.831	
2) 療養者の具体的な援助計画が立案	3年次生	3.71±0.806	0.210
	4年次生	3.52±0.750	
3) 在宅における看護の特徴について記載・説明	3年次生	3.79±0.932	0.330
	4年次生	3.90±0.700	
4) サービスを利用しながら療養している対象者の生活について説明	3年次生	4.04±0.955	0.225
	4年次生	3.81±1.030	
5) 他職種の役割、多機能の役割を理解	3年次生	4.33±0.761	0.500
	4年次生	4.33±0.913	
6) 多職種連携の実際とその必要性について理解	3年次生	4.13±1.076	0.145
	4年次生	4.43±0.746	
7) 多職種連携の中での看護職の役割を理解	3年次生	4.08±0.776	0.051
	4年次生	4.43±0.598	
8) 地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考える	3年次生	4.00±0.417	0.500
	4年次生	4.00±0.447	
9) 実習の学びを考察	3年次生	4.04±0.690	0.424
	4年次生	4.00±0.707	
10) 事前学修を十分にを行い、実習に必要な知識を身につける	3年次生	4.33±0.868	0.367
	4年次生	4.24±0.889	
11) 療養者および家族に対し尊重した態度で接する	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	
12) 療養者やび家族、実習指導者との約束を守る	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	
13) 教員への報告、約束を守る	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	

表8 他の施設実習のルーブリック評価表における学生自己評価

評価項目	得点		p 値
	学年	Mean±SD	
5) 他職種の役割、多機能の役割を理解	3年次生	4.35±0.824	0.276
	4年次生	4.24±0.760	
6) 多職種連携の実際とその必要性について理解	3年次生	4.27±0.804	0.326
	4年次生	4.35±0.716	
7) 多職種連携の中での看護職の役割を理解	3年次生	4.11±0.737	0.321
	4年次生	4.19±0.739	
8) 地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考える	3年次生	4.22±0.417	0.134
	4年次生	4.08±0.640	
9) 実習の学びを考察	3年次生	4.08±0.682	0.114
	4年次生	3.84±0.986	
10) 事前学修を十分にを行い、実習に必要な知識を身につける	3年次生	4.43±0.689	0.460
	4年次生	4.41±0.985	
11) 療養者および家族に対し尊重した態度で接する	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	
12) 療養者やび家族、実習指導者との約束を守る	3年次生	4.95±0.329	0.179
	4年次生	5.00±0.000	
13) 教員への報告、約束を守る	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	

への報告」、「尊重した態度」、次いで「学びの考察」であった。同様に4年次では、学修項目「療養者・家族・実習指導者との約束」、「尊重した態度」、「教員への報告」の順だった。他の実習施設においては3年次生・4年次生ともに「尊重した態度」、「療養者・家族・実習指導者との約束」、「教員への報告」は最高得点だった。

次に指導者による3年次生と4年次生の評価について比較を行った。有意水準は0.05とする。

評価項目「多職種の役割、多機能の役割の理解」、

表9 訪問看護ステーション実習のルーブリック評価表における指導者評価

評価項目	得点		p 値
	学年	Mean±SD	
1) アセスメントし、看護診断・目標を設定	3年次生	3.11±0.333	0.610
	4年次生	3.00±0.535	
2) 療養者の具体的な援助計画が立案	3年次生	3.22±0.441	0.292
	4年次生	2.88±0.835	
3) 在宅における看護の特徴について記載・説明	3年次生	2.89±0.333	0.347
	4年次生	3.13±0.641	
4) サービスを利用しながら療養している対象者の生活について説明	3年次生	2.78±0.667	0.793
	4年次生	2.88±0.835	
5) 他職種の役割、多機能の役割を理解	3年次生	3.00±0.000	0.045*
	4年次生	3.38±0.518	
6) 多職種連携の実際とその必要性について理解	3年次生	3.44±0.882	0.127
	4年次生	2.75±0.886	
7) 多職種連携の中での看護職の役割を理解	3年次生	3.22±0.441	0.048*
	4年次生	2.75±0.463	
8) 地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考える	3年次生	3.44±0.527	0.169
	4年次生	3.13±0.354	
9) 実習の学びを考察	3年次生	3.78±0.833	0.134
	4年次生	3.25±0.463	
10) 事前学修を十分に行い、実習に必要な知識を身につける	3年次生	3.67±0.500	0.256
	4年次生	3.38±0.518	
11) 療養者および家族に対し尊重した態度で接する	3年次生	4.78±0.667	0.935
	4年次生	4.75±0.707	
12) 療養者やび家族、実習指導者との約束を守る	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	
13) 教員への報告、約束を守る	3年次生	5.00±0.000	0.013*
	4年次生	4.00±1.069	

*: p < 0.05

表10 他の施設実習のルーブリック評価表における指導者評価

評価項目	得点		p 値
	学年	Mean±SD	
5) 他職種の役割、多機能の役割を理解	3年次生	3.71±0.784	0.501
	4年次生	3.86±0.743	
6) 多職種連携の実際とその必要性について理解	3年次生	3.95±0.740	0.315
	4年次生	3.69±1.004	
7) 多職種連携の中での看護職の役割を理解	3年次生	3.76±1.091	0.612
	4年次生	3.62±0.86	
8) 地域包括ケアにおける看護職の役割を発展的に考える	3年次生	4.14±0.573	0.096
	4年次生	3.86±0.581	
9) 実習の学びを考察	3年次生	3.62±0.865	0.944
	4年次生	3.62±0.728	
10) 事前学修を十分に行い、実習に必要な知識を身につける	3年次生	3.95±0.921	0.188
	4年次生	3.59±0.983	
11) 療養者および家族に対し尊重した態度で接する	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	
12) 療養者やび家族、実習指導者との約束を守る	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	
13) 教員への報告、約束を守る	3年次生	5.00±0.000	
	4年次生	5.00±0.000	

「多職種連携の中での看護職の役割理解」、「教員への報告、約束」において有意差が認められた。他の施設の指導者評価（9項目）に関して有意差は認められなかった。

Ⅶ. 考察

1. 学生のルーブリック評価表と目標の達成、活用状況

3年次生において得点が高かった項目と目標達成についてみると、「事前学修と実習に必要な知識の獲得」により「指導者が指導した内容の理解」

につながり、「グループメンバーとのコミュニケーション」の良好さにも影響していることが伺える。自由記載では「自分が何を目標に実習に取り組みばよいか確認することができた」や「看護師の役割についても評価表を活用することで、目標を明確にして実習に臨むことができた」と計画表立案への活用に効果的であった。これは古城ら(2013)の学びの達成度が視覚的に確認できたことにより、学生・教員共に形成評価が可能となったこと、為永ら(2021)の学生が実習で学ぶべき視点を定めることができたことについて一定の効果として挙げていることを支持している。

次に「最後の振り返りとして活用したが、自分の不足している部分を再確認できた」は、遠海ら(2021)のルーブリック活用によって学生は結果がどの程度達成される途上にあるのか、またどの程度達成されたのか、成果の省察が可能となるとして同様の見解を示しており、教育における有効性が示唆された。

また、3年次生では「多職種・多機能の役割」、「多職種連携の理解」、「多職種連携の中での看護師の役割」に関する項目得点が高く、自由記載では「細かくレベル分けされていることで何をすればいいのかわかりやすかった」、「在宅の特徴についても学ぶ点が記載されていたため、意識して実習に取り組むことができた」〔多職種との関りや役割・連携については、自分で意識して学ぶことができた〕と実習内容と学生の感想が連動していることが推察される。3年次生のルーブリック評価表の「評価表の活用頻度」(図10)では3回以上実施が4年次生に比し高く、「在宅看護実習への活用」(図9)の「できた」とする回答も4年次生よりも高かった。この要因の一つとして事前指導(図1)において3年次生は在宅看護方法論、実習前特別演習の授業を活用してルーブリック評価表の説明を受けルーブリック評価表に触れる機会が多かったことが影響していると考えられる。

深山ら(2018)はルーブリックの活用によって良かった点として実習目標に対する到達度の把握

がしやすくなったことをあげ、さらに高頻度使用群が標準使用群よりも実習目標の達成をめざす行動得点が高いことを明らかにしており、本研究においてもそれを支持する結果が得られた。

一方、4年次生において学修得点が高い項目は「多職種連携の中での看護師の役割」、「多職種連携の理解」、「多職種・多機能の役割」で3年次生のそれと類似するものの、自由記載においては「項目一つ一つの内容が難しく、評価するのが大変だった」、「地域包括ケアについて考えるのが難しかった」、「具体的な内容などがなく、とても難しかった」と対極の感想があった。4年次生はコロナ禍でありながらも、3年次生よりも臨地実習の経験が多く、病院実習において看護職や多職種等、それぞれの役割を学ぶことができたことと推察される。その為、在宅看護実習においては、地域における多職種連携を学ぼうとしていたと推察される。事前指導として4年次生には実習開始時の学内オリエンテーション・実習中の指導のみで3年次生よりも説明回数が少なかったが、学生のルーブリック自己評価では3年次生と4年次生における有意差は認められず、説明回数が少なかったことの直接的な影響は認められなかった。

2. 指導者のルーブリック評価表と目標の達成、活用状況

指導者はルーブリック評価において、3年次生と4年次生の達成目標の行動・態度の「尊重した態度」の項目において、高い評価を示していた。また、訪問看護ステーションの指導者による評価で、3年次生が有意に高かった「多職種連携の中での看護職の役割を理解」では、地域包括ケアに関わるさまざまな職種の中で、まず、看護職の役割を理解しようとする行動や「教員への報告、約束を守る」態度を評価したものと伺える。また、「多職種の役割、多機能の役割」に関しては4年次生が3年次生よりも多い実習経験から看護職だけでなく多職種の方々を捉えようとする学修態度を評価したものと推察される。

学生評価はこれまで訪問看護ステーションのみに依頼していたが、今回の調査時点からは全ての実習施設に依頼した。当然ながら〔2日間の実習では効果的に評価することが難しかった〕、〔指導担当者がすべてを把握することは難しく、評価に困ってしまう項目もある〕、〔スタッフ間で情報共有しながら関わり、評価しているが評価までとなると難しい〕という現場の、偽らざる声が寄せられた。

しかし、新たに開拓した実習施設の指導者からは〔看護教育の目指すものを知ることができた〕、〔ルーブリック評価を活用したのは当事業所でも初めての試みで、評価側として大変参考になった〕、〔今回、評価基準と基準が細かく記載されたことでスタッフ間での情報共有がしやすく、評価にもスタッフ間でばらつきがなくなった〕といった意見が寄せられた。これは指導者側の質問紙調査の結果において、肯定評価に関する1位から3位までの項目が「実習達成目標の理解」「学生指導のしやすさ」「学生目標の到達状況の把握」であったことが、指導者から寄せられた意見を反映している。本研究において、今回から学生評価に参加した施設から、ルーブリック評価表を活用することで到達度の視点が明確になり、学生の実習の頻度が高い施設ほど、ルーブリック使用頻度が高まり、活用意義を感じている状況が伺われた。Stevensら(2014)はルーブリックを活用する効果として教員の教育技法の向上を指摘しており、さまざまな資格取得を目的とした実習生を引き受けている施設からは、指導者間において本学の看護教育の目標理解等に有益であったとする意見が寄せられ、ルーブリック評価表の活用は指導者の教育技法の向上にも寄与できると考えられた。

VIII. 研究の限界と課題

A 大学の在宅看護実習指導者は訪問看護師だけに限らず、医療・福祉・保健分野に渡り、様々な資格と経験知を有するため生活・健康課題をと

らえる視点において、専門職間での完全な一致は困難であることは否めず課題であった。また、COVID-19の感染状況から実習が危ぶまれた状況でさまざまな方法を選択した実習であり、学修項目どおりに実習環境が整わなかったこと、また、母集団が少なかったことにより、知見の一般化において限界がある。

VIII. 結論

1. 学生はルーブリック評価表を活用することで自ら目標を明確にし、主体的に実習に取り組むことができた。
2. 学生はルーブリック評価表を活用することで、多職種・多機能の役割と多職種連携について理解を深めることができた。
3. 多職種の指導者間においても、ルーブリック評価表の活用により教育目標を共有する等、指導者の教育技法の向上へ寄与できた。
4. ルーブリック評価表は、今後、学生・指導者間のコミュニケーションツールとして双方向性を確保することによって学修が深化し教育効果が期待できる。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご多用な業務の中、ご指導ご協力いただきました訪問看護ステーションをはじめとする施設事業者の皆様、職員の皆様に心より感謝申し上げます。

VIII. 引用文献

- 安藤輝次(2014). ルーブリックの学習促進機能、関西大学文学論集、64(3)、1-26.
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会2012. 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ：文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm (参照2021年10月25日)
- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会2020.

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告.

https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf

(参照2021年10月25日)

Dannelle D. Stevens, Antonia. J. Levi (2014) 佐藤浩章 (2014)

大学教員のためのルーブリック評価入門, 玉川大学出版部
遠海友紀、岸磨貴子、久保田賢一 (2012). 初年次教育における自律的な学習を促すルーブリックの活用、日本教育工学会論文誌、36、209-212.

古城幸子、木下香織 (2013). 老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価を導入して、新見公立大学紀要、34、15-20.

深山華織、岡本双美子、中村裕美子他 (2018). 在宅看護実習における学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果、大阪府立大学看護学雑誌、24 (1)、49-56

岡山加奈、萩あや子、高木範子ら (2014). 既存の基礎看護実習表の課題とルーブリックを用いた評価表の提案、岡山県立大学保健福祉学部紀要、21 (1)、9-16.

田中耕治 (2003). 教育評価の未来を拓く：目標に準拠した評価の現状・課題・展望、ミネルヴァ書房

為永義憲、蒔田寛子、山根友絵 (2021). 在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した効果の検証、日本在宅看護学会誌、9 (2)、67-76.

山田嘉徳、森朋子、毛利美穂他 (2015). 学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討、関西大学高等教育研究、(6)、21-30.